

Lost Opportunities

雅子妃の病は日本の損失だ

皇室 新たな皇族誕生の陰で苦しみ続ける孤独なプリンセス
宮内庁につぶされたキャリアウーマンの悲劇は皇室の前近代性を象徴している

ベン・ヒルズ (ジャーナリスト)

新しい皇族誕生の知らせが伝わったとき、皇太子夫妻が暮らす東宮御所は複雑な空気に包まれたはずだ。喜び、安堵感、そして残念な気持ち……。

喜びはもちろん、秋篠宮紀子妃が無事に出産したことに対するもの。これで踏継ぎの誕生を期待するプレッシャーから少しは解放される——皇太子と雅子妃がそう考えたとしても不思議ではない。そして生まれたのが男の子ならば、残念な気持ちもあるにちがいない。男子誕生なら皇統はいずれ秋篠宮家に移る可能性が高い。

だが皇太子妃にとっては、何も変わらなはずだ。ハーバード大学出身の外交官だった彼女は、13年前にキャリアを捨てて皇太子の求婚を受け入れた。この決断は愛のためというより、祖国への義務感から生まれたものだった。

秋篠宮が3人目の子供をつくることにし

た理由はただ一つ。健康状態のすぐれない高齢の天皇が、このまま男児が生まれなければ、古代から続く皇室の血統が次の世代で絶えてしまうのではないかとひどく心配しているからだ——この見方はもはや、皇室関係者の常識と化している。

だが、雅子妃は再度の不妊治療を受けることを拒否した(5年前に娘の愛子内親王を出産するときは不妊治療に頼った。それには、もうすぐ43歳という年齢の問題もある。体外受精は精神的、肉体的に負担が大きいことも、理由の一つだろう。そして不妊治療の権威として彼女が厚い信頼を寄せていた東京大学の堤治教授が、補助金の不正流用問題で東宮職御用掛を辞任したことも、皇太子妃の判断に影響を与えた可能性がある。

雅子妃が神経をひどく痛んでいることは、もはや周知の事実といっている。その原因は、男の子を産めというプレッシャーと、

皇族の一挙手一投足に細かく口を出す宮内庁の東横だ。皇太子は2年前、雅子妃のキャリアと人格を「否定する」動きがあったと公の場で語り、宮内庁の官僚に怒りの矛先を向けたことがある。

真の病名を発表しない宮内庁

宮内庁の公式発表によれば彼女の病名は「適応障害」であり、少しずつ健康な状態に戻りつつあるとされる。だが、この説明は信じられない。本当に適応障害なら半年以内に回復するはずだが、症状はもう3年近く続いている。私が話を聞いた複数の国際的専門家によると、雅子妃は重度の鬱病だ。環境を変えるしか回復の道はない。

雅子妃は現在、主治医である慶応大学の野村裕教授(精神科)から認知療法と向精神薬による治療を受けている。先日の2週間のオランダ滞在も、精神科医がついて行かなければ不可能な状態だった。このこと

からも、彼女の症状の不安定さがわかる。

皇位継承問題については、解決の兆しが見えた時期もあった。小泉純一郎首相の私的諮問機関「皇室典範に関する有識者会議」が、女性・女系天皇の容認を打ち出したときだ。いわゆる「女帝」は、一説に2600年ともいわれる皇室の長い歴史の大半を通じて認められてきた。全部で29ある世界各国の王室でも同様だ。

しかし日本のフェミニストにとっては残念なことだ。紀子妃の妊娠で皇室典範の改正は先送りになった。次期首相の最有力候補とされる安倍晋三内閣官房長官は、小泉の路線を踏襲しない公算が大きい。もし紀子妃の子供が女の子だった場合、安倍はむしろ旧皇族の男子を皇統に復帰させ、皇室を維持する道を探るとみられている(第二次大戦後、GHQ連合軍総司令部の指示により11宮家が皇統から離脱した)。

問題は、旧皇族男子の皇位継承を日本の国民が受け入れるかどうかだ。世論調査によると、国民の圧倒的多数は天皇が空位になるよりは女帝のほうが良いと考えている。一方、雅子妃の問題は解決の糸口が見えない。東宮筋によると、彼女は気分がひどくふさぎ込み、さまざまな制限にいらだち、皇太子が求婚時に約束したような意義のある役割を見つけられずにいる。今の彼女は孤独で、友人や家族のほとんどから隔離されている(父親の小和田恒は国際司法裁判所の判事なので、両親はオランダに住んでいる)。

睡眠障害や頭痛、疲労感に悩まされ、周囲に対してかんしゃくを起こすこともあるようだ。雅子妃が公務をこなせないため、



2人のプリンセス 雅子妃は重度の鬱病に悩まされている。その苦しみは、秋篠宮 紀子妃(右)が無事に出産しても変わらない

皇太子は一人で式典に出席しなければならぬ。彼女自身は国の代表として外国を訪問したいと熱望しているが、宮内庁は許可を出さずとしない。

状況があまりに絶望的なため、東京では雅子妃がオランダ静養に向かう前、あらぬ噂が飛び交った——彼女は「亡命」を考えていて、人権侵害で国連に訴えてほしいとイギリス人研究者に相談したらしい、と。

出口のないロイヤルカップル

当初は宮内庁と対立する雅子妃を支持していた世論も、彼女に背を向けつつある(今こそ国民の支援が最も必要な時期なのだ)。インターネットのサイトでは、こんな冷淡極まりない意見も飛び出した。「役立つ。皇太子が再婚できるように、早くいなくなればいいのに」

「どうして両を矯正しないの」と、侮辱するコメントもあった。外国で教育を受け、

5カ国語を操る彼女への敬意から、「要するに白人が好きなんじゃないか」という人種差別的な書き込みもあった。

この不運なロイヤルカップルに「出口」はあるのだろうか。離婚話がささやかれたこともあるが、皇室では100年以上も前例がない。皇室に批判的な同志社大学の浅野健一教授(ジャーナリズム)はこう指摘する。「日本には一度入ったら出られない一家が二つある。一つはヤクザ。もう一つが皇室だ」

鬱に悩む者のおよそ7分の1は、自ら命を絶つことを選ぶ。となると、およそ考えにくいことだが、雅子妃がそうした道をたどる懸念を完全に払拭することは困難だ。あるいは妻をこれ以上苦しませないために、皇太子が皇位継承を放棄するケースも想定できない。皇室典範の第3条には、次のような規定がある。「皇嗣に、精神若しくは身体の不治の重患があり、又は

重大な事故があるときは、(中略)皇位継承の順序を変えることができる」

だが、これも可能性はきわめて低い。皇太子はこれまでの人生すべてを、皇位に就くという目的のためにささげてきた。それに失敗はあったにせよ、皇太子は皇室の名譽と自分の義務を強く意識している人物だ。個人的に可能性が高いと思うのは、雅子妃も美智子皇后と同じ運命をたどるといふシナリオだ。心の病に耐え続けているうちに、いつしか暗から輝きがうせ、かつては才気にあふれていた快活な女性が、何年かに一度小声で決まり文句をつぶやくだけになり、メディアの前に出るときは必ず夫の三歩後ろで控えるようになる……。

日本は絶好のチャンスを見逃してしまったのかもしれない。21世紀にふさわしい皇室の姿を示し、世界のイメージを一変させたであろう皇室外交の担い手を失いつつあるのだから。